

第31回 窯屋のあくなき挑戦
— 窯道具の使い方 —

窯道具とは、製品を窯で『焼く』ときに使う道具です。やきものが完成するまでには、大きく成形・施釉・焼成の3つの工程があり、中でも焼成が最も重要な工程といわれています。それは、いくら成形と施釉の完成度が高くても、焼成で失敗すると商品にはならないからです。一つでも多くの製品を「商品」にするため、いかに失敗を少なく、かつ限られた窯のスペースに沢山の製品を窯詰めすることができたか。これがとても重要なことでした。今回は、窯道具に注目して、窯道具から見た当時の窯屋たちの創意工夫を紹介いたします。

美濃焼の窯詰めは、7世紀(飛鳥時代)から15世紀前半(室町時代)までは、窯の中に製品を裸で積み重ねる「裸積み」でしたが、15世紀中頃になると製品に釉薬を掛けるものが多くなったため、匣鉢さやに入れて窯の中

積み上げる「匣鉢積み」が普及します。匣鉢が多用されるようになると、匣鉢内に多くの製品を入れるため、様々な窯道具が生み出されました。その様子は、窯の構造が窖窯あなぐま(地下式)から大窯(半地下式)、そして登窯のぼりぐま(地上式・複数の焼成室)へ変わる15世紀後半(戦国時代)から17世紀前半(江戸時代)において顕著にみることが出来ます。この時期には、量産器種であった丸皿の形状が深いものから浅いものへ変化しており、これは単なる生産の省力化だけでなく、いかに匣鉢に多くの商品を詰め込むことができるかを考えた結果でもあります。当時の窯屋が効率の良い窯詰めを行うことにより、不良品を少なくし、良品を増やす「歩留まり率」を高めようとしていた姿が垣間見えます。



匣鉢 (15世紀中) 下石西山窯



窯道具 (17世紀初)
元屋敷窯：重要文化財



器内に向付が入られた美濃伊賀水指 (17世紀初)
元屋敷窯：重要文化財

イベントのご案内



開館44年収集の軌跡Ⅰ
「○△□ 美濃桃山陶の形展」

同時開催「窯道具の使い方」
6月10日(土)～9月3日(日)

関連イベント

プラ板で美濃桃山陶キーホルダー
をつくろう！ (体験無料)

日時 8月11日(金・祝)
午前10時～午後4時
※体験時間15分程度

